

春 東京・春・音楽祭 2026

Spring Festival in Tokyo

J.S.バッハ：無伴奏チェロ組曲 第1番

J.S.バッハの《無伴奏チェロ組曲》（全6曲）が書かれたのは、ケーテン宮廷楽長時代（1717-23）の前期と推定される。各組曲は「アルマンド／クーラント／サラバンド／ジーグ」の4つの舞曲を基本としながら、第1曲に「プレリュード（前奏曲）」を、ジーグの前の第5曲に「メヌエット／ガヴオット／ブーレ」のいずれかの流行舞曲を置く構成になっている。

第1番ではト長調というチェロの運指に合った調性が、伸びやかな響きを生み出す。第1曲プレリュードは本組曲のなかでも最も有名な楽章で、間断なく続く16分音符の流れがその背後で進む和声を浮き彫りにする。第2曲は安らぎに満ちたアルマンド、第3曲はイタリア型の急速な3拍子によるクーラント、第4曲は優雅なサラバンド、第5曲には2つのメヌエットが用いられている。そして第6曲の軽快な短いジーグで曲を閉じる。

西村朗：チェロのためのオード

「チェロのためのオード」は、作曲家・西村朗が1991年、チェリストの堤剛から委嘱されて作曲した無伴奏チェロのための小品。西村作品の特徴である「ヘテロフォニー」の概念が反映されており、単一の楽器でありながら重音や旋律の装飾により多層的な響きが付与されている。なお、本作は堤剛の70歳を祝うプロジェクトのために書かれたため、曲中には「ハッピーバースデー」を暗示する音型が織り込まれている。

J.S.バッハ：無伴奏チェロ組曲 第3番

第3番の第1曲プレリュードは、16分音符が淀みなく流れるスケールの大きな音楽。第2曲は、軽やかな愛らしさを感じさせるアルマンド。第3曲は、音階的な分散和音とスラーで奏されるイタリア型クーラント。第4曲サラバンドは、重音奏法が多用され、全楽章の中で最もゆったりと奏でられる。第5曲ブーレは、演奏会用の小品として奏されることも多い。第6曲は、終曲にふさわしい堂々としたジーグ。

黛敏郎：BUNRAKU

戦後日本のクラシック界を牽引した作曲家・黛敏郎が1960年に書いた「BUNRAKU」は、邦人作曲家によるチェロ独奏作品として、演奏家の貴重なレパートリーになっている。文楽（人形浄瑠璃）の太棹三味線のダイナミックさとドラマティックな響きを、チェロという楽器で表現しようしたもので、きわめて独創的な作品となっている。

J.S.バッハ：無伴奏チェロ組曲 第2番

第2番のニ短調という調性は、音楽を内省的な方向へ導く。第1曲プレリュードは、和声よりも旋律そのものに重点が置かれている。第2曲は高度な技巧が要求されるアルマンド、第3曲のシンプルなイタリア型クーラントを経て、第4曲は引き伸ばされた旋律に和音が重なり、憂愁を湛えた表情を見せるサラバンド。第5曲の2つのメヌエットでは、主調の第1メヌエットがニ短調、第2メヌエットがニ長調となり、古風な響きを醸す。第6曲のフランス風ジーグは、規則正しい8小節の楽節構成による。